

大学院派遣研修報告書

所属校	武蔵村山市立第三小学校	氏名	逢坂 隆
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	総合教育開発専攻 国際理解教育コース 日本語教育サブコース
研究テーマ	言語技術の習得を軸にした内容重視のアプローチによる日本語指導 － 小学校国語科における説明的文章の読解及び作文を通して －		

I 研究の概要

1 はじめに

国語科学習は日本語を第一言語とする児童を想定して構成されている。そのため、日本語を第一言語とする児童と同じ学習目標や教材・学習計画では、高度な日本語能力を身に付けているJSL児童(日本語指導が必要な児童)を除き、指導効果を上げることは難しい。

そこで、本研究では国語科と関連させた日本語指導を行うに当たって「言語技術」に着目した指導を試みた。本研究では、言語技術を鶴田(1995)にしたがい次のように定義する。

言語技術とは、言語活動や言語生活を適切かつ効果的に営むための技術である。それは文章表現の理論を踏まえた「読み方・書き方」、音声言語表現の理論を踏まえた「話し方・聞き方」である。(鶴田 1995)

言語技術に焦点を当てた指導は、読み方・書き方・話し方・聞き方といった「学び方」の学習を促す。在籍学級における国語科授業との関連学習の中で言語技術に着目した学習を経験することによって、JSL児童は在籍学級で自律的に国語学習を進めていく能力を身に付けていくことになると考えられる。

2 先行研究

学校における取り出し授業では主として生活言語中心の日本語指導が行われている。学習言語能力の育成については在籍学級における教科学習の補習という位置付けで行われており、学習言語能力の育成を意図的・計画的に育成していく指導は少ない(東京外国語大学 1998)。

学習言語能力を育成する上で有効な指導法の一つに内容重視のアプローチによる日本語指導がある。その利点として、「教科内容を導入することにより日本語の学習が実質的な意味を持つ活動となりモチベーションが高まる」、「認知的社会的発達段階に応じた内容を学習することを通して認知面、学力面を支える日本語力が養成できる」ことなどが挙げられている(齋藤 1999)。

在籍学級における国語科学習と関連させた日本語指導に関する先行研究は少ないが、光元(1998)によるライト教材の活用、清田(2001)による母語を活用した日本語指導、岡崎(2002)による教科・母語・日本語相互育成学習、文部科学省(2003)によるJSLカリキュラムがある。JSLカリキュラムを除くこれらの先行研究は、特定の単元をどのように学習していくかに焦点が当てられており、そこでの指導・学習方法を他の単元にまで広く応用することは難しい。JSLカリキュラムだけが国語科の学習に参加する上で必要な基本的な技能を「学習スキル」という形で具現化を試みている。このようにスキルに焦点を当てた方法論は、どの単元にでも応用できる可能性がある。

一方、国語教育では言語技術教育というアプローチによる指導が行われている。国語にかかわる能力を言語技術を身に付けさせることで向上させようという試みである(市毛 2002)。これは単なるドリル的なスキル学習ではなく、教材文の学習という文脈の下で行われている。

主として日本語母語話者である児童・生徒を対象に行われてきた言語技術教育をJSL児童向けに重点化を図り、在籍学級での国語の授業に参加できる力を高めていくことが本研究の基本的な考え方である。在籍学級で行われる国語科の教材文をもとに内容重視のアプローチを採用することで言語技術の習得を図り、在籍学級の授業に積極的に参加できる児童の育成を目指している。

3 研究目的

本研究では、取り出しの授業において言語技術を学習したJSL児童が、在籍学級の国語科授業でその技術を活用して学習参加をしているかを参与観察及び録画・録音データ、作文等の学習作品を基に分析し、取り出し授業における言語技術の学習の有効性について考える。

4 研究方法

対象児童が在籍学級での学習に参加できるように、取り出し授業で言語技術の学習を在籍学級の授業に先行して行った。その言語技術学習の効果を見るために、取り出し授業と在籍学級での授業の様子を参与観察、ビデオ録画、音声録音、使用教材等を通して検討する。

4.1 対象児童

- ・小学校1学年時に外国から来日編入した児童
- ・日本語の学習は編入後に開始
- ・日本語学級での生活言語中心の日本語学習を終えており、日常会話能力は身に付けている
- ・「話す」「聞く」能力に比べ「読む」「書く」能力は低く、在籍学級での国語科授業に参加できる能力は十分とは言えない。

4.2 資料

- ・収集期間 2005年1月18日～2月28日
- ・参与観察（フィールドノートによる記録 17日、12時間45分）、VTR録画・ICレコーダー録音とその文字化データ（16日、12時間）、学級担任へのインタビューデータ（1時間45分）、教材文、対象児童が使用したワークシート

4.3 分析の方法

取り出しの授業において言語技術を学習した対象児童が、在籍学級の国語科授業でその技術を活用してどのように学習参加をしているかを検討するために、次のような分析の観点を設定し、分析を進める。分析にあたっては、分析の観点到該当する録音・録画データ、それらの文字化データ、ワークシート、ノート、作文、担任へのインタビューおよび参与観察した結果を発話内容、文章、態度・行動から分析する。

- 1) 取り出し授業で学んだ言語技術を取り出し授業や在籍学級での学習でどのように活用しているか
- 2) 言語技術の学習が在籍学級での学習参加の様子にどのような変化をもたらしたか

5 実践の概要

実施した授業は、小学校4年国語科の単元「点字を通して考える」（学校図書株式会社 2002『みんなと学ぶ小学校国語4年 下』）を題材にした授業である。取り出しの授業を在籍学級の授業に先行させ、途中から並行して実施する形で進めた。取り出しの授業は筆者が、在籍学級の授業は学級担任が行った。取り出しの授業は、説明的文章を学習した後に、文章構成を生かした作文を書くという流れにした。その学習目標は、在籍学級の授業プランに照らし、1) 内容をまとまりごとに読み取る、2) 調べたことを基に自分の考えをもち、組み立てを考えて作文を書く、とした。この学習目標を達成するために必要な言語技術として、次の5つを設定した。

- ① 文章構成を理解することができる
- ② キーワード、キーセンテンスを抜き出すことができる
- ③ 意味段落のまとまりごとに要約することができる
- ④ メモのとり方を理解し、メモを取ることができる
- ⑤ 文章構成に気をつけながら話し合ったことや調べたことについての作文を書くことができる

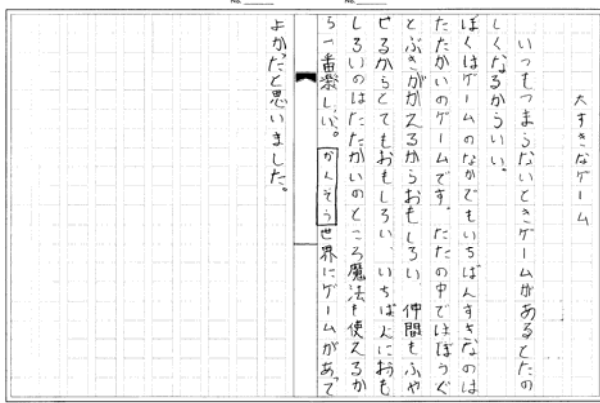
6 分析結果と考察の一例

6.1 文章構成に関する学習及び活用状況

取り出し授業の前に対象児童が書いた作文を「事前作文」、取り出し授業が終わったあと書いた作文を「事後作文」として以下に示す。事前作文、事後作文のいずれも、書く内容について教師とのやりとりを十分に行っ

た上で書かれたものである。

事前作文



事後作文



事前作文は、教師とのやりとりに沿って書かれており、段落構成を意識することなく思いついたまま書いた作文となっている。一方、事後作文は、教師とのやりとりを文章構成要素である「はじめ」「なか」「まとめ」「むすび」ごとに整理し、段落構成を意識しながら書かれた作文となっている。

事後作文を書く前に行った大まかな学習過程は次の通りである。まず、取り出し授業において、教材文を学習する前に文章構成にかかわる学習を文章構成ワークシートの文章例を通して「はじめ」「なか」「まとめ」「むすび」といった文章構成要素のだいたいを理解した。その後、リライト教材文の読解を通して文章構成に関する理解を深めた上で車いすを体験し、車いすに関する作文学習を行った。その作文を書く過程については、文章構成にしたがって書く内容をカードを用いて整理し、教師とのやりとりを通して文章構成要素ごとに何を書くのかを構想した。そして実際に書く段階では、教師とのやりとりを通して文章構成要素のつながりを考えながら作文を書き進めた。

このように、文章構成にかかわる言語技術を学習するために教材文だけではなく難易度の低い文章もワークシートとして提示したことや学習内容を段階的に設定したことによって、事後作文のように文章構成を生かした作文を書くことができたと思われる。

6.2 学習に参加する態度の変容

取り出し授業後では、主として次のような学習態度の変容が在籍学級でみられた。

- ・リライト教材文を通して言語技術の学習を行うなかで内容の理解を図ることができたため、在籍学級において教材文に関する大まかな話の流れを問う学習課題では、積極的に発言することができた
- ・在籍学級では、取り出し授業でのキーワード・キーセンテンスを抜き出すという言語技術の学習を生かし適切なキーワードを抜き出すまで他者とのやりとりを積極的に行っていた

7 結果と課題

7.1 結果

- ・在籍学級の授業に先行して言語技術の学習を行ったことで、在籍学級の授業の中で言語技術を活用しながら学習を進めることができた
- ・言語技術学習は、言語技術そのものの学習だけではなく内容を理解するためのツールとして活用でき、それが在籍学級における積極的な学習参加態度につながっていった
- ・JSL児童における言語技術学習では日本語母語話者対象とは異なり、リライト教材文、言語技術の理解を助けるワークシート等の補助教材を用いながら、段階的に学習を進める必要があることが示唆された
- ・言語技術の学習を通して身に付けた知識や技能は、学びの場や内容が変わっても応用・運用することができることから、言語技術学習は学習言語能力を高める上での一つの重要な要素となる

7.2 課題

- ・認知的能力や日本語能力の異なる児童についても、言語技術の学習が国語学習に参加していく上で有効

かどうかを検討する

- ・日本語能力に応じた言語技術学習のあり方を追究する
- ・文学的文章においても言語技術学習は有効であるかどうかを検討する

参考文献（抜粋）

- 逢坂 隆(2005)「言語技術の習得を軸にした内容重視のアプローチによる日本語指導 —小学校国語科における説明的文章の読解及び作文を通して—」『日本語教育学会秋季大会予稿集』日本語教育学会、pp. 157-163
- 市毛勝雄(1985)『説明文の読み方・書き方』明治図書
- (2002)『国語力を育てる言語技術教育入門』明治図書
- 岡崎敏雄・清田淳子・原みずほ・朱桂栄・小田珠生・袴田久美子(2003)「「教科・母語・日本語相互育成学習」は日本語学習言語能力の育成に有効か」『人文科学紀要』お茶の水女子大学
- 外国人子女の日本語指導に関する調査協力者会議(1998)『外国人子女の日本語指導に関する調査研究（最終報告書）』東京外国語大学留学生日本語教育センター、p. 15
- 岸 学(2004)『説明文理解の心理学』北大路書房
- 清田淳子(2001)「教科としての『国語』と日本語教育を統合した内容重視のアプローチの試み」お茶の水女子大学大学院人間文化研究科言語文化専攻日本語教育コース修士論文
- 輿水 実著・渋谷孝編・解説(1998)『現代国語教育論集成・輿水 実集：国語科の基本的技能基本的指導過程他』明治図書
- 齋藤ひろみ(1999)「教科と日本語の統合教育の可能性—内容重視のアプローチを年少者日本語教育へどのように応用するか」『中国帰国者定着促進センター「紀要」』No. 7、中国帰国者定着促進センター
- (2002)「学校教育における日本語学習支援」『日本語学』明治書院、pp. 23-35
- 渋谷 孝(1994)『「作文技術」で作文指導の転換を図る』『教育科学 国語教育』1月号、明治図書
- (1999)『説明文教材の新しい教え方』明治図書
- 朱 桂栄(2003)「教科学習における母語の役割—来日間もない中国人児童の「国語」学習の場合」『日本語教育』日本語教育学会、pp. 75-84
- 鶴田清司(1995)「言語技術教育とは何か」『月刊国語教育』第15巻9号、東京法令
- 光元 聰江(2002)「子どもの成長を支援する日本語教育—日本語と国語との関連指導を通して」『岡山大学教育学部研究集録』No.108、岡山大学教育学部、pp. 133-142
- 文部科学省初等中等教育局国際教育課(2003)『学校教育におけるJSLカリキュラムの開発について（最終報告）—小学校編』文部科学省初等中等教育局国際教育課
- Brinton、 D. M. & Snow、 M. A. & Wesche、 M. B. (1989) *Content-Based Second Language Instruction*、 Newbury House
- Chamot. A.U. & O'Malley、 J.M. (1994) *THE CALLA HANDBOOK Implementing the Cognitive Academic Language Approach*、 ADDISON-WESLEY PUBLISHING COMPANY
- Cummins、 J. (1980) *The Construct of Language Proficiency in Bilingual Education*、 Georgetown University Press.
- (1983) *Language Proficiency and Academic Achievement*. In *Issues in Language Testing Research*、 edited by J. W. Oller

II 学校等における研修成果の活用計画

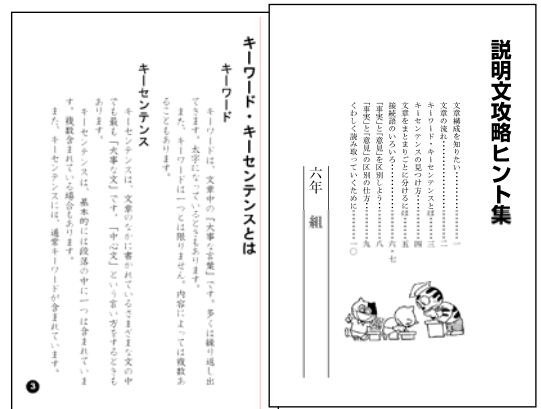
本研究は、日本語教育分野に属する研究である。したがって、本研究をフィードバックできるのは日本語教育にかかわっている学校や団体、個人となると思われる。そこで、研究成果等の報告は、年少者対象の日本語教育にかかわる研究会、あるいは機会があれば都下の日本語学級の関係者を対象に主として行いたいと考えている。直近の予定では、3月末にNPO法人「多文化子ども支援ネット」から依頼されている講演会に講師として参加することになっている。

また、本研究は国語科指導と関連させた日本語教育の在り方を考えており、国語科教育にも研究成果の一部を還元することができる。本校では、文部科学省による学力向上拠点校形成事業にかかわっており、国語の授業を構築するに当たって本研究の成果を活用できると考えている。

大学院派遣研修成果活用状況

所 属 校	武蔵村山市立第三小学校	氏 名	逢 坂 隆
派遣大学院	東京学芸大学大学院	専攻・コース	総合教育開発専攻・国際理解教育コース 日本語教育サブコース
研究主題	言語技術の習得を軸にした内容重視のアプローチによる日本語指導 － 小学校国語科と関連させた日本語指導 －		
1 所属校での成果活用	<p>本研究の指導の在り方、指導対象児童は、日本語を母語とする児童ではなく、第二言語として日本語を学ぶ児童（以下、JSL児童）を対象にしている。しかし、本研究の基底にある「言語技術」に関わる指導は国語教育においても有効である。そこで、それらの成果を以下の場面で活用した。</p> <p>(1) 担任クラスにおける国語科指導</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 説明文および物語文の読解に必要な言語技術を学習することを通して、児童の読みの力の向上を図っている ・ 作文学習では、報告文、生活文、読書感想文などのさまざまなタイプに応じた「書き方」の学習を進めるなかで読み手を意識した文章を書く力を育成している <p>(2) 校内研究</p> <p>国語科の基礎学力の向上を図るために説明文学習において次の観点からの提案授業を行った。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 教材構成の工夫：読む力を高めるために、リライト教材文を活用し文章構造を理解したのちに教材文の読解を行う ・ 学習活動上の工夫：接続語・指示語、キーワード、キーセンテンス等の重要語句・文を視覚化し、それらを読みを生かすようにする ・ 個に応じた指導の工夫：児童の読解能力に応じたワークシートを複数用意し、児童自身に選択させ学習を進める ・ 主体的に読むための学習展開の工夫：筆者の願いを読み取ったあと、それに対する自分の考えをもった上で、文章の読み取りに入る ・ 読み取りに必要な読解技能の明示化…説明文読解に必要な技能を学ぶための冊子を作成する 		
2 委員会・研修会での成果活用	<p>NPO法人 多文化子ども支援ネットの研修会</p> <p>日 時 2006年3月26日（日） 13:00～</p> <p>場 所 渋谷区立神南小学校会議室</p> <p>講演会 「小学校国語科授業と関連させた日本語指導 ～言語技術の習得を通して～」</p> <p>参加人数 50名</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 受講者は、日本語教師や地域日本語教室で日本語を教えている指導者、日本語学級担当者等 ・ 日本語指導が必要な児童が国語科の授業に参加できるようにするために、「読み方、書き方」といった「学び方」の学習に力点をおいた実践の報告を中心に講演を行った ・ 講演後、「読み方」「書き方」の学習を進めるにあたってどのような点に留意しながら行ったらよいか等の実践レベルでの質問が出された 		
3 成果を生かし	<p>平成18年6月23日（金）公開授業</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> <p>平成17・18・19年度文部科学省学力向上拠点形成事業指定校</p> <p>学力向上を目指す授業</p> <p>－ 授業改善の視点を明らかにして －</p> </div>		

- 1 単元名 「人間を知る」 教材文：川島隆太著「自分の脳を自分で育てる」
- 2 単元の主なねらい
 - ・学習材の内容(脳の前頭前野の働き)を理解して自分の生活に生かそうとする(関心・意欲・態度)
 - ・書かれている内容について、文章構成を把握し事実と意見を区別しながら読み取ることを通して、自分の考えをもつことができる(読むこと)
- 3 主な授業改善の視点
 - (1) 学習作業法の工夫
 - ①ワークシートの活用
 - 1) 1枚のワークシートで教材文の論理展開およびその内容が端的にわかるようにする
 - 2) ワークシートは1時間ごとに少しずつ完成に近づくように構成されている
 - 3) 1時間ごとに貼り付けていく形式であるため、児童の読解能力に応じた貼り付けシートを用意することができる
 - ②接続語・指示語、キーワード、キーセンテンス等の重要語句・文を視覚化
 - (2) 指導と評価の一体化：学習段階ごとに評価規準を設定
 - (3) 学習展開の工夫：最初の段階で作者の主張を読み取り、自分なりの読みのめあてをもった上で本文の読み取りに入る
 - (4) 説明文の読み方を提示：『説明文攻略ヒント集』(右図)という冊子にして児童がいつでも活用できるようにする



- 4 結果
 - ・文章構造を学習の初期段階で把握し、筆者の主張を念頭におきながら説明文を読み取ることで、筆者がその主張を読み手に伝えるためにどのように論を展開しているかを内容の理解とともに把握することができた
 - ・ワークシート1枚で論の展開が分かるため、児童が話の内容を把握しやすい。
 - ・児童の読解能力に応じたワークシート(学習時間ごとの貼り付けシート)を用意したため、読解能力差があっても意欲的に取り組むことできた
 - ・説明文の読み方を「説明文攻略ヒント集」として示すことで、これまで学んだ読み方を整理することができ、それらをツールとして教材文の読みに役立てることができた
- 5 課題
 - ・必要な事柄を読み取る力が十分ではないため、意味段落内の文章構造を理解する力をより一層育成していく
 - ・読解能力差に応じたワークシートのあり方を追究する必要がある
 - ・「説明文攻略ヒント集」に要約(大意要約・要旨要約)の仕方を加えるなど充実を図っていく

市の研究発表会で本研究の一端を報告する予定である。市には、日本語を十分に使うことができない児童が在籍している学校あるいは日本語学級が配置されている学校がある。本研究内容を報告することを通して、児童対象の日本語指導の在り方、教科学習、特に国語科との関連指導の在り方をJSL児童を担当している担任教員等に提供できればと考えている。

また、本研究は説明文教材を中心に進められているため、本研究の成果と課題を踏まえて、物語文教材においても言語技術を基軸にすえた読解能力の育成を図るための実践研究を行っていきたいと考えている。その際は、物語文読解に必要な言語技術を習得するための教材をあわせて作成していく予定である。